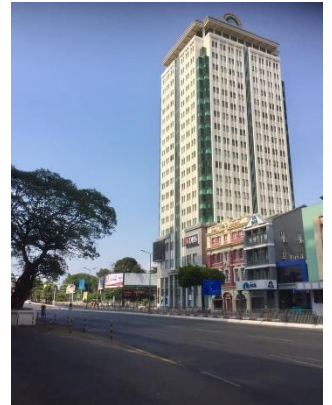


海外赴任を振り返って

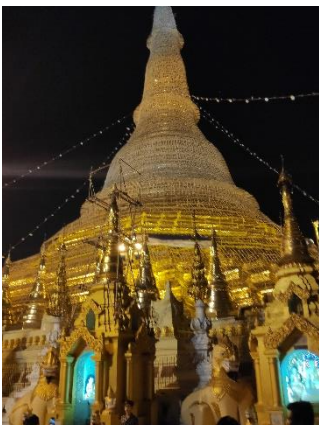
みなさんこんにちは。最終号寄稿までに1か月以上かかってしまい、大変失礼しました。3月16日夜にヤンゴンを発ち、翌17日午後、無事に帯広に帰任しました。今まさに猛威を振るっているコロナウイルスですが、私が帰国した際の成田空港、そして羽田空港も厳戒態勢でした。こんなに人が少なく、そして静かな空港は初めてでした。

帰国して一月以上が経ち、私も帯広市立西陵中学校に赴任しましたが、1学期が始まってすぐに今の状態になってしまいました。この長いトンネルを抜けるのがいつになるのか。こればかりは誰にもわからないことではありますが、まずは私が携わっている子どもたちのために全力を尽くしていこうと思っています。

目を転じて…私が赴任していたヤンゴン日本人学校ですが、非常に厳しい状況になっております。私が離緬する時ミャンマーはコロナ感染者数0だったのですが、3月末に初めての感染者を確認。そこから徐々に数が増え4月25日現在で感染者数146名、うち退院者9名、死亡者5名(ミャンマー保健・スポーツ省公表)という状況です。以前紹介したように、ミャンマーの医療はあまり進んではいません。そのため、国として早い段階でのロックダウンを実施。飛行機の国際線をストップし海外からの渡航者を止め、生活物資購入などの必要物資入手時以外の外出禁止を行いました。外食店はすべてテイクアウトだけとなり、5人以上で出歩いたり集会をしていると警察に逮捕される状況になっています。にぎわっていた通りも、人も車も全くない状況。そんな状態のため、日本国大使館から邦人への帰国呼びかけもでていて、子どもたちもほとんどが帰国してしまいました。そんな中でも様々な事情で日本に帰ることができない子どもたちもいます。そのために、校長、教頭を含め少数の先生方が残り、(大使館、学校運営委員会から勧めがあり、半分ほどの教員とその家族は日本に一時帰国したとのことです。)ミャンマーに残った子、そして日本に戻らなければならなかった子ども達のために授業を行っています。当然、残った教員だけでこのようなことはできないので、一時帰国した教員、そしてロックダウンのためまだ赴任することが叶わない新赴任の先生方が一丸となり、Zoomを使って授業を行っています。子どもたちのために全力で頑張る先生方の話を聞き、心から凄いなと思うと同時に、頑張ってくれ！と強く願い、応援しています。



私が海外赴任を希望し、その当時の校長に「試験を受けさせてください。」とお願いにあがった際、「何をしに海外に行くんだ？」と聞かれました。私なりに考えていたことを色々話したのですが、その話を遮るように「違うだろ！そこに困っている子どもがいるからじゃないのか！」と一喝されたことを、今でもはっきり覚えています。日本から離れた異国の地。そこで見て、経験することは、まさにそこでしか得ることができない宝物です。しかしながら、そういう経験ができるのも、そこに子どもがいるからです。そして異国で学ぶ子どもたちは、日本では絶対に経験できないこと、進んだ教育機材や機会などを得ることができますが、日本でなければ経験できないことや、どうしても異国であるため経験できていない不自由さを抱えながらそこに暮らしています。そういう子どもたちのために、今自分は何をすることができるのか、どうやって支えてあげることができるのか、どんな力をつけてあげることができるのか。それを真摯に考え実行する。教師である以上原点であるこの命題が色濃く浮かび上がってくると思います。このことについてしっかりと考え、自分なりの答えを出すことができたこと。これが私が3年海外で過ごして得た一番大きな財産だと思っています。



コロナの渦は今や全世界的なものとなり、今はとどまる気配がありません。この十勝帯広にも、赴任先の事情で任地に赴くことができず、未だ残られている先生もいらっしゃるという話も聞きました。その先生の立場になってみると、きっと胸の内は不安でいっぱいだろうと思います。ですが、先に述べたように、間違いなく先生たちを待っている子どもたちが世界にいます。そんな子どもたちのために全力でかかわれるように、今は力を蓄えて、準備して、そしてかかわる時が来たら全力で子どもたちに応じてあげてほしいと思います。

3年間つまらない通信にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。私に何かできることがあれば微力ながらお手伝いいたしますので、お気軽にご連絡ください。